

# ストーリーで共感を生む 「まちやど」から見える地域ファンづくり (一般社団法人 日本まちやど協会)

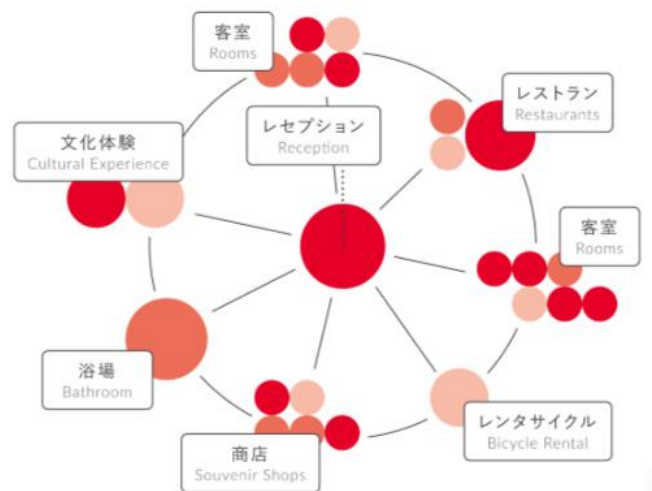
## 1. はじめに

「暮らすように滞在する」という旅行スタイルが日本においても注目されるようになって久しいが、そのあり方は地域や実施主体によって様々である。日本政府が観光立国宣言をするずっと前から、一部の宿泊施設では長期滞在型の外国人旅行者を意識した対応がなされてきたが、近年における外国人旅行者の増加に伴い、受け入れ体制を整える観光事業者が増えてきたことも影響し、この「暮らすように滞在する」スタイルが一定の日本人旅行者からも支持されるようになってきたといえる。

一方で、地域内の回遊性や消費額を高めることへの課題を持つ地域、観光資源の発掘に頭を悩ませる地域は多い。そこで今回は、地域にすでにあるものを活かしながら、観光客を受け入れることを実現し、回遊性や消費額の向上も期待されている「まちやど」の取り組みを紹介する。

## 2. まち全体を宿に見立て、地域一体でもてなす“まちやど”の取り組み

2017年6月に全国の“まちやど”事業従事者が中心となり、「地域価値の向上を目指すモラルある事業者の連携・育成」を目的に設立した日本まちやど協会では、「まちやど」のことを、「まちを一つの宿と見立て宿泊施設と地域の日常をネットワークさせ、まちぐるみで宿泊客をもてなすことで地域価値を向上していく事業」と説明している(※図1参照)。従来型の宿泊施設には、食事処や風呂、お土産屋、遊技場などが揃い、施設内ですべて完結できるスタイルが主流である。一方「まちやど」では、まち全体を宿と見立て、例えば食事はおすすめ飲食店や商店街を紹介してもらい、風呂は近くの銭湯を利用し、他事業者と連携して造成された文化体験を楽しむことができるなどのスタイルがとられている。中には、スタッフが宿泊客を連れて街中を案内するサービスを行う宿もあり、地元の人しか知らないようなスポットやエピソードを知ってもらうことで、より深みのある滞在時間を過ごしてもらう工夫がなされている。



※図1 (日本まちやど協会 WEB サイトより)

## 3. 「まちやど」が地域の消費を生む

まちやどの仕組みは、宿泊客に自然と地域を回遊することを促し、見知らぬ地域のまるで住人になったような異日常の体験と、その体験を通して生まれる地域内の事業者や住民との交流が満足度を一層高めていると考えられるが、更に注目したいのは、地域にお金が落ちているということである。京都大学プロジェクト研究員の稲垣憲治氏による、台東区谷中のまちやど「hanare」を対象とした独自調査(2017年度実績データを使用)においては、一般的なチェーンホテルに比べ、「hanare」は約5倍の地域の稼ぎを生んでいるとの報告がされている(※2)。

「hanare」では、先にあげた周辺商店や銭湯の紹介の他、チェックイン時に宿泊客に宿おすすめのスポットをまとめた周辺MAPを渡したり、近くの自転車屋と連携しレンタサイクルサービスを案内することで、回遊をしやすい環境を整えている。

また港町のある「まちやど」では、朝食は宿泊者自ら宿近くの商店で購入した干物を宿内のグリルで焼き、用意されたご飯やみそ汁と一緒に食べることもできるなど、宿の外での消費を促進する仕組みが作られている。

チェーン店や口コミサイト上の人気店に押され、昔から地域に愛されてきた店が閉店を余儀なくされる事態が相次ぐ中、地域内で利益をシェアする「まちやど」の仕組みは、地域の個人店を守ることに繋がっているといえるだろう。

#### 4. それぞれの地域ストーリーを価値にする

各地にあるまちやどは、提供するサービスや施設、コンセプトや価格帯など、その形態は地域や運営主体によって様々であるが、共通しているのは地域のストーリー（地域が守ってきた文化や景観、住民が愛してきた場、地域に根差した産業、抱える課題など）を旅行者に伝えたり、感じてもらうことを大事にしている点であり、それにより独自性を高めているといえる。例えば、まちの景観づくりの様子を実際に歩きながら紹介したり、昔から住民が利用する店を訪問し店主に話をしてもらうことで、地域が大事にしている考え方を伝えようとしている「まちやど」や、地域住民で守ってきた建物を宿にし、住民も訪れるカフェを併設することで、地域が愛着を持って利用する様子やこれまでの歴史を体感してもらおうとする「まちやど」もある。

宿泊施設だけでいえば、部屋にテレビを置いていない施設も多く、いわばオールインクルーシブ型の宿泊を求めている旅行者からは、かえって不満が出るかもしれない。しかし、その地域ならではの体験を求める旅行者にとっては、まちやどの滞在を通して得られるものが特別な、価値ある旅行体験の提供に繋がっている。

#### 《おわりに》

観光客の増加とともに、地域住民の生活に影響を及ぼすようなオーバーツーリズムの問題が指摘されている今、観光客の数を追い求める観光から、質を高める観光への転換が求められています。そのためには、客単価を上げることや1人あたりの訪問回数を増やすことに留まらず、地域性を尊重した持続可能な観光のあり方が重視されるようになっていきます。地域のありのままの姿を魅力と感じ、尊重しようとする意識を持つ観光客が来てくれることは、理想的な形といえるかもしれませんが、それは簡単なことではありません。単に地域のそのままの姿を見せるだけでは魅力は伝わりにくく、そこにはどのような切り口で、どの部分を、どのように伝えるかという、編集やデザインの視点がとても重要だと思えます。

たとえ「まちやど」をゼロから作らずとも、「まちやど」のあり方には、地域が大事にしている考え方に共感してくれる観光客を呼び込み、一過性ではなくその後も積極的に地域を応援しようとするファンを増やすとともに、引いてはオーバーツーリズムをはじめとする地域課題の解決に繋がる糸口があるのではないかと感じました。

（地域振興部事業課 地域支援窓口 区部担当 佐々木）



谷中のまちやど「hanare」のレセプション  
は、カフェやギャラリーも備える複合文化施設「HAGISO」の一角にある

チェックイン後、宿泊者は「HAGISO」からは、まち中を歩いてすぐの宿泊棟、「丸越荘」へ

◆関連リンク 一般社団法人日本まちやど協会 HP：<http://machiado.jp/>

※2 出典／「新・公民連携最前線 PPP まちづくり く「地域の稼ぎ」を増やすまちづくりの手法とは？分散型ホテル事業と地域マーケット事業で検証」(京都大学 プロジェクト研究員 稲垣 憲治氏) 2019.2.27  
：<https://project.nikkeibp.co.jp/atclppp/PPP/report/021800169/?P=1>